

□ 寄 稿 □

山口 通之

久保田誼君と私は高校の同期生、職業は高校教諭で社会科担当、最後の赴任校は共に伊那北高校で退職。実に40年余の付き合いでした。彼の趣味は渓流釣りでは私はその弟子、私は書探りで彼の引率者、山河の幸を求めて相互に支え合う中で、今話題のウマに3回ほど出くわしたのも思い出深い。

追悼「久保田誼君の業績は今こそ宝―彼を偲ぶ」

私は彼を久保田君(こくはでん)と呼び、先生と呼んだことはなく、彼の私への呼びかけもしかりであった。

私の手元には、彼の著書や『伊那路』(上伊那郷土研究会)に寄稿した論文などが相当数に達している。その中で二つ取り上げてみたい。

一つは、『春雷をよぶ声―青春をともにひらく挑戦の日々』(1985年、民衆社)。この書は226頁にわたり、箕輪工業高等

学校での多彩な教育実践が生き生きと紹介されています。二つ目は、『陸軍伊那飛行場 自主ゼミ 地域社会研究』と題した分り版刷りの42頁の冊子です。1〜3年生の21人が、2年がかりで自主研究による成果をまとめたものです。そのあとがきには「今まで遠く存在だった戦争が大変身近なものに思えてきました。当時の高校生や特に朝鮮人が動員されていたことに驚きました。いい勉強になったと思います」と記されています。この研究が、陸軍伊那飛行場の存

在を校外に伝える契機となり、その後の各方面からの実態解明に繋がりました。この二つの書を見ても、彼の物事への視座の原点は、教育現場に根を下ろした実践の中で培われたのだと痛感します。その後、彼の目は校外へと広がり、様々な出来事への対応が展開されていきました。次に紹介する内容はその一端です。

伊那市では、2007年から近現代史に焦点を当てた講座を継続して開講していま

す。年5〜6回、講師は3人ほどで今年で19回を迎え、県内では特異な取組といつてよいでしょう。私は2回目から、彼は3回目から加わり、2019年まで19講座を担



上の原保育園の子どもたちに平和について語り、一緒に考える久保田誼君(2024年1月30日、長野日報掲載)

当しました。彼の最初の講座は、2009年の第5回「大正・昭和の恐慌と伊那の民衆運動」、第6回「陸軍伊那飛行場と戦時下の伊那」でした。私が刺激を受けた講座は、第6年次(2012年度)の第3回「井月の時代の伊那(1) 草莽維新を中心に」、連続して第4回「井月の時代の伊那(2) 近代を巡る抗争」でした。井上井月を時代背景や地域との関わりに視点を置き、考察する幅の広さに感嘆しました。さすが歴史、法学を専攻した基礎の上に立って、専門性を生かし伊那の近現代史を真正面から扱ったのは面目躍如といつほかありません。

この他、彼の活動の幾つかを挙げる、毎年5月に開催される「憲法記念日の集い」の発起人、『土の原の歩み』の編纂委員、土の原保育園の園児に平和のお話、飛行場の視察への対応など多岐にわたっています。書き足りない内容は何かの機会にと考えていますが、いずれにせよ彼の残した宝に改めて学び、少しでも自分の思索に生かれば、彼への追悼になろうかと思っているところです。

合掌